

(調査研究報告書)

少子高齢・人口減少社会における

現代人の感情及び行動特性に関する研究

スマートフォンや SNS の普及に着目して―

加納 寛子(山形大学 准教授)

1. 問題の所在

内閣府による平成 28 年版高齢社会白書によれば、65 歳以上の高齢者のいる世帯は、世帯数は 23,572 千世帯であり、全世帯(50,431 千世帯)の 46.7%を占めているとのことである。さらに、昭和 55(1980)年では世帯構造の中で三世帯世帯の割合が一番多く、全体の半数を占めていたが、平成 26(2014)年では夫婦のみの世帯が一番多く約 3 割を占めており、単独世帯と合わせると半数を超える状況であり、孤独化が進んでいる。

孤独化の傾向は日本に限ったことではなく、英国でも人々の孤独化傾向が国家レベルの問題として指摘され、2018 年 1 月に孤独担当相を置き、同年 10 月に自殺予防担当相を新設した。英国では人口約5300万人のイングランド地方だけで毎年約4500人が自ら命を絶っており、自殺は45歳未満の男性の主な死因の一つになっているとのことだ。

少子高齢化により人口減少が進むだけでなく、人々が孤独化していき自殺によっても労働人口を失っていく傾向は、社会全体として大きな損失といえる。孤独化の要因は、伴侶や家族の死別、子どもの独立など、排除しきれない環境による要因もあるが、見過ごせないのは、環境としては孤独でないにもかかわらず、孤独感を感じる若者の増加である。中学 3 年生にあたる 15 歳で孤独感を感じている割合は、先進国の中で日本が第 1 位である(図 1)。この調査の結果より、15 歳の青少年の 3 人に1人は孤独を感じていることがわかる。この傾向は、日本特有のものといえよう。15 歳の青少年が孤独と感じる要因は、伴侶や家族の死別等の要因は考えにくい。家族や友達が周囲にいても孤独を感じているのではないか。その要因は、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の普及により、浅く広いつながりは増えたものの、本当にわかり合える関係を築けないのではないだろうか。それを特徴づける事件が、2014 年 10 月に仙台で起きた。東北大工学部の学生が「ぼっち(孤独)になったのは教授たちのせい」といって刃物を持って講義中に乱

入したという事件である。刃物を持った学生が、授業を受けている学生に対し、「僕と友達になってくれる人」と尋ねたところ、大半の学生が場の空気を読んで手を挙げたため、事なきを得た事件である。

当該学生は 20 歳を過ぎていたため、本名や顔写真が新聞やテレビで報道されていた。そこで、当該学生の名前で SNS を検索したところ、本人のものと思われる SNS を見つけることができた、SNS には 100 人ほどの友達が登録されており、SNS 上には 100 名ほどの友達がいた。記載内容を観察したところ、夏休みにバイクで日本各地にいる高校時代の同級生の元を訪問し、いっしょにご飯を食べた記録などが写真入りで掲載されていた。いっしょにご飯を食べたり、SNS でつながる友達がいても孤独を感じていたことがうかがえた。このような事件で浮上する青少年は氷山の一角に過ぎない。SNS でつながって、時々いっしょにご飯を食べる程度の、表面的な人間関係しか構築できていない学生は多数いることが推察された。

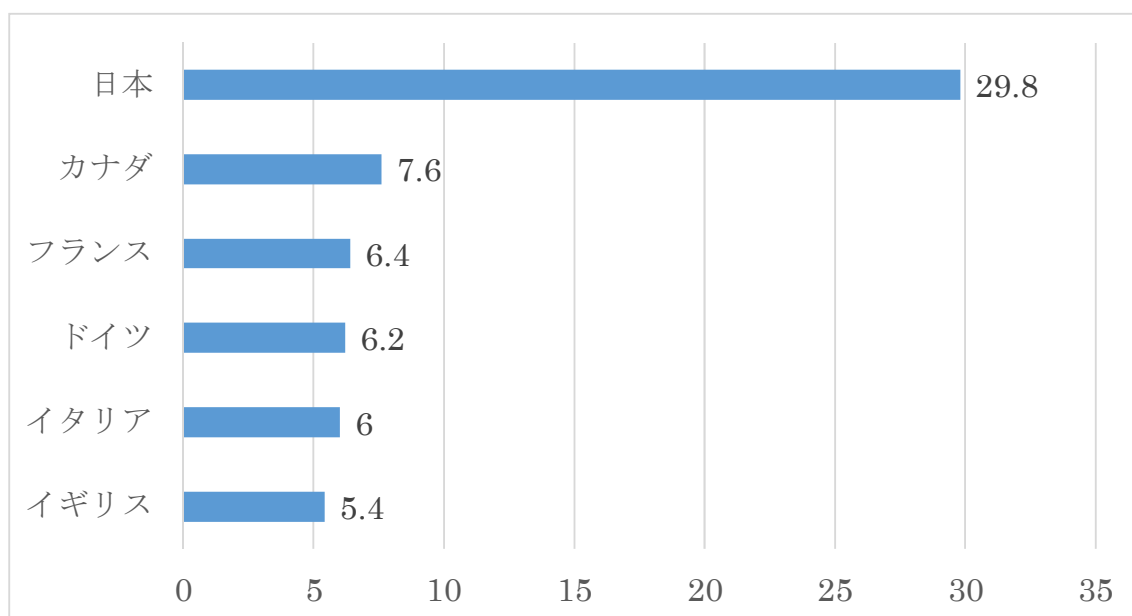


図 1 自分が孤独であると回答した 15 歳の割合

UNICEF Innocenti Research Centre「An overview of child well-being in rich countries」(2007 年)を元に作成[2003 年に実施された調査]。

また、最近の中高生は、友達と一緒にいても、それぞれ自分のスマートフォンの画面を見ているとよく指摘され、若年層世代も孤独化が進んでいるのでい

るであろう。
高齢者世代・若年者世代ともに孤独化が進行する背景には、単に、少子高齢化による影響だけではなく、スマートフォンやパソコンなどの情報機器の普及に伴う行動特性の変化もあるのではないだろうか。

そこで、スマートフォンや SNS の普及に着目して、少子高齢・人口減少社会における現代人の行動特性を明らかにすることを、本研究の目的とする。

2. 本研究の方法

少子高齢・人口減少社会における現代人の感情及び行動特性を明らかにするために、質問紙調査によって調べる。被調査者は、株式会社マクロミルに被験者登録をしている人を対象とし、無作為抽出による 824 名(男性 412 名, 女性 412 名)である。質問紙調査は 2017 年 3 月に実施した。

3. 結果と考察

3. 1 パソコン・スマートフォンの利用

図1 図2には、スマートフォン等の利用(利用内容は問わない) パソコンの利用(利用内容は問わない)に関する性差を示した。スマートフォン等にはスマートフォン及び携帯電話及びインターネットに接続可能な小型ゲーム機、画面サイズ8インチ未満のタブレット(iPod touch, iPad mini, Android、ウインドウズタブレット等)も含むとした。これらの図より、スマートフォンは女性の方が男性より利用する傾向にあるが、パソコンに関しては、女性より男性の方が利用する傾向にあった。

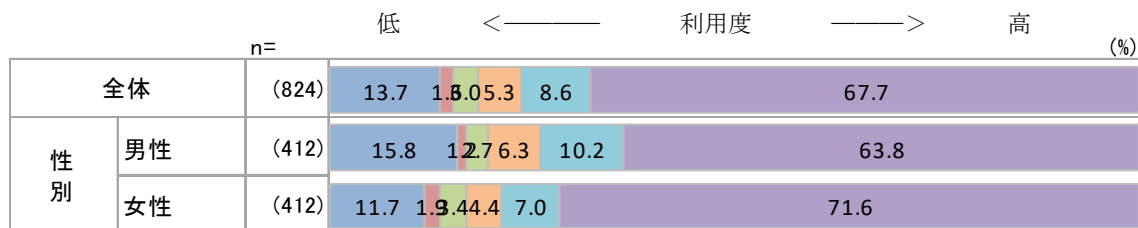


図1 スマートフォン等の利用(利用内容は問わない)に関する性差

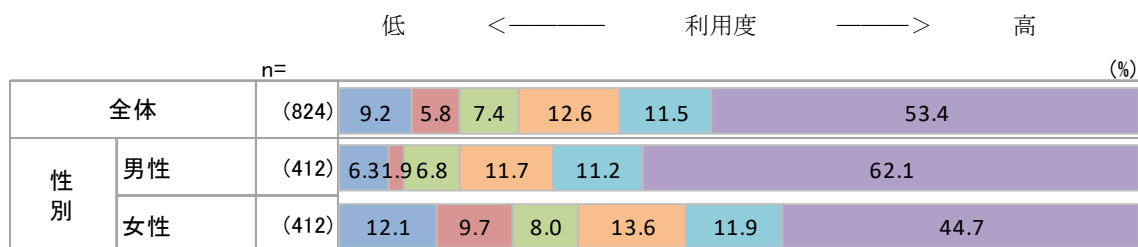


図2 パソコンの利用(利用内容は問わない)に関する性差

図3 図4には、スマートフォン等の利用(利用内容は問わない) パソコンの利用(利用内容は問わない)に関する世代毎の違いを示した。これらの図より、スマートフォンに関しては、若年世代ほど使用する傾向にあり、パソコンは、高い年齢ほど使用する傾向にあることがわかった。昨今の大学生の中には、大学のレポートですらスマートフォンで作成する者もいる。若い世代にとって、パソコンよりスマートフォンでの読み書きの方が身近であり、年齢の高い世代は、パソコンでの読み書きの方が好まれるようだ。さらに、若い世代向けのサイトや電子掲示板では、スマートフォンからのアクセスに限定されている場合もあり、そのようなサイトでは、意識や考え方、意見が、偏っている場合も少なくない。加納(2007)では、サイト毎の思想や論調の偏りを「バーチャル版村社会」

と命名しており、スマートフォンからしかアクセスでないサイトは、バーチャル版村社会の傾向が強い印象を受けている。しかしながら、スマートフォン専用サイトの文言を画面毎にスマートフォン上でコピーし、パソコンに送ることによって、パソコン上で読めないわけではないが、サイトのデータを一括してダウンロードしパソコンで解析することは困難であり、今後の検討課題である。

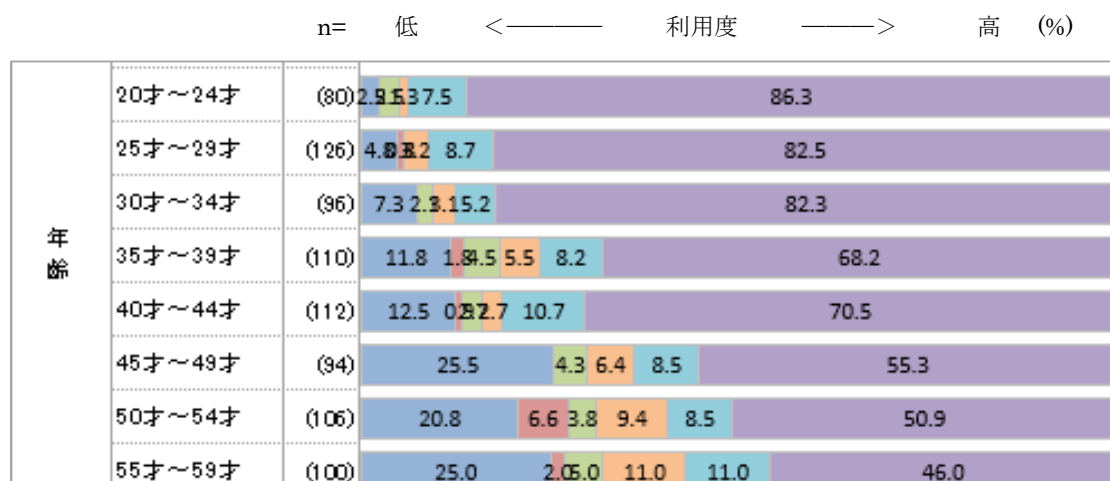


図3 スマートフォン等の利用(利用内容は問わない)に関する世代毎の違い

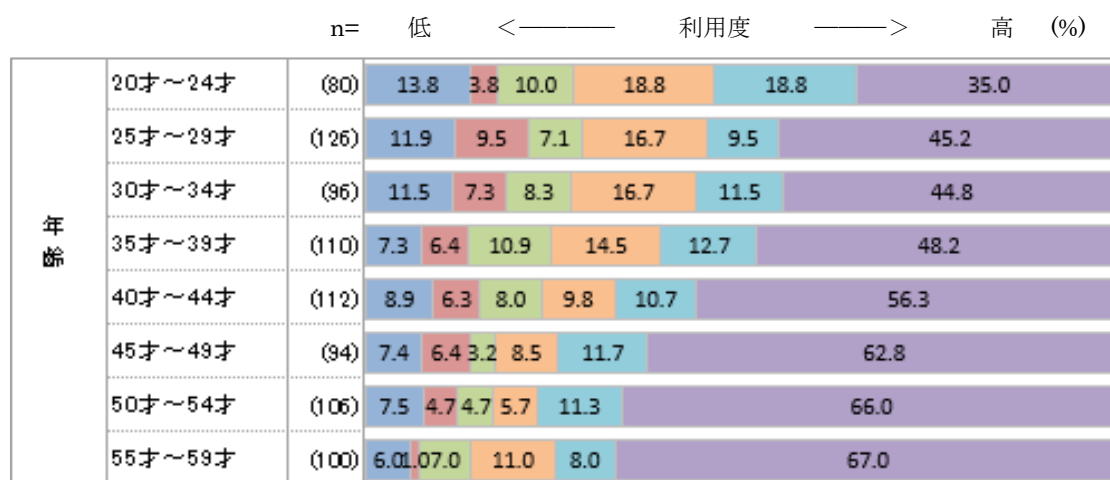


図4 パソコンの利用(利用内容は問わない)に関する世代毎の違い

図5には、利用内容ごとのパソコンおよびスマートフォン等の利用状況を示した。利用内容を見ると、スマートフォン等は、娯楽やLINEの利用や、インターネット検索、メール、画像・動画(閲覧・撮影含む)に利用する傾向にあることがわかった。一方パソコンは、仕事やメール、インターネット検索の利用にとどまっている。

スマートフォンにできることは、およそパソコンでも利用可能であるが、スマートフォンの方が、パソコンに比べて幅広い用途で利用されていることがわかった。

低 <———— 利用度 ———> 高

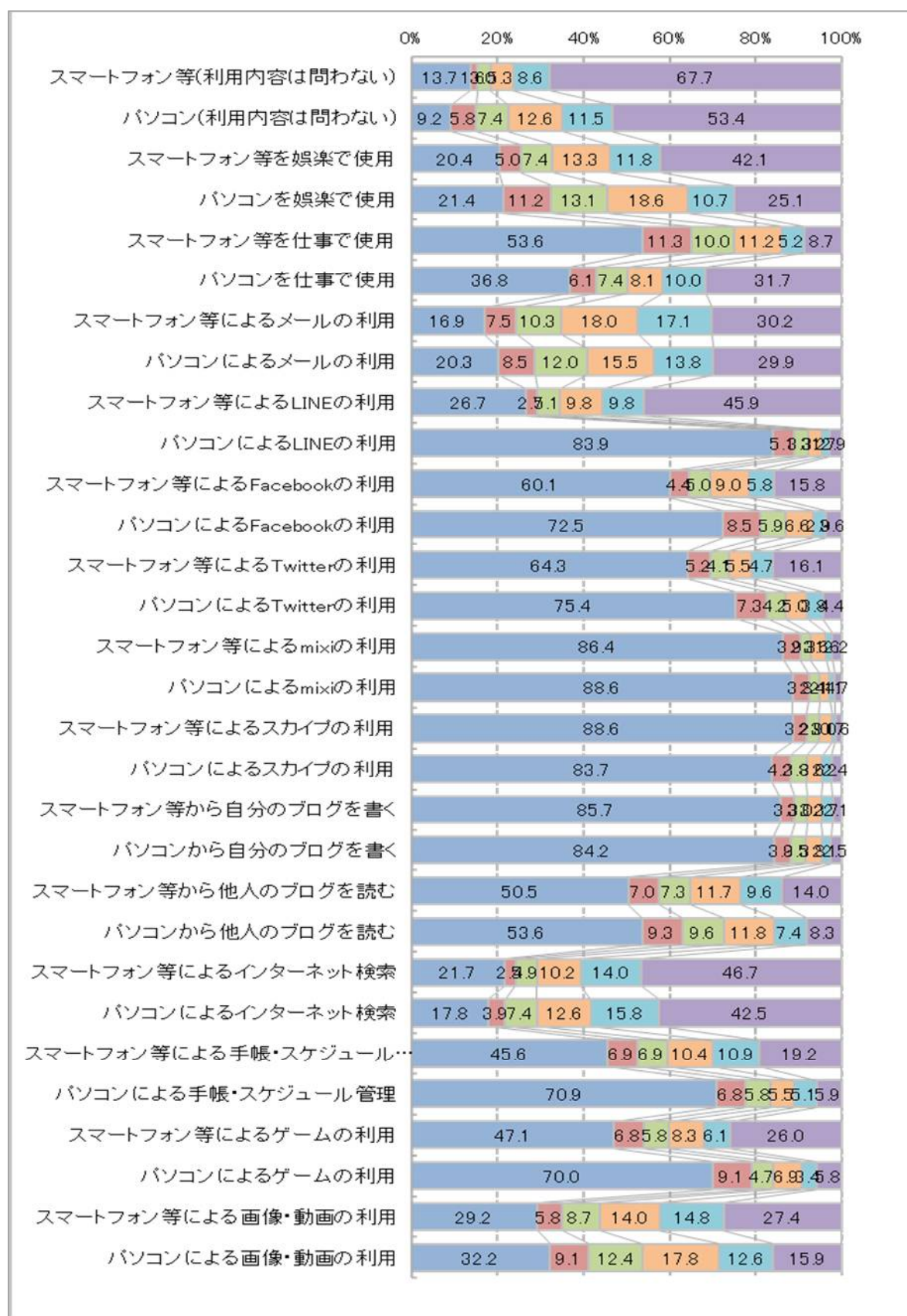


図 5 利用内容ごとのスマートフォンおよびパソコンの利用状況

3. 2 パソコン・スマートフォンの利用に伴う行動や意識・身体への影響

図6～図8 パソコン・スマートフォンの利用に伴う行動や意識・身体への影響を示した。図6を見ると、「スマートフォンを常に触っている」という項目に、よくあてはまる・あてはまるを選んでいる者は、約4割いることがわかった。同様に、スマートフォンが手の届く範囲にないと不安を感じる者は2割いることがわかった。インターネット無しでは生きられないと感じている者も、よくあてはまる・あてはまるを合わせると3割の者がそのようにとらえていることがわかった。

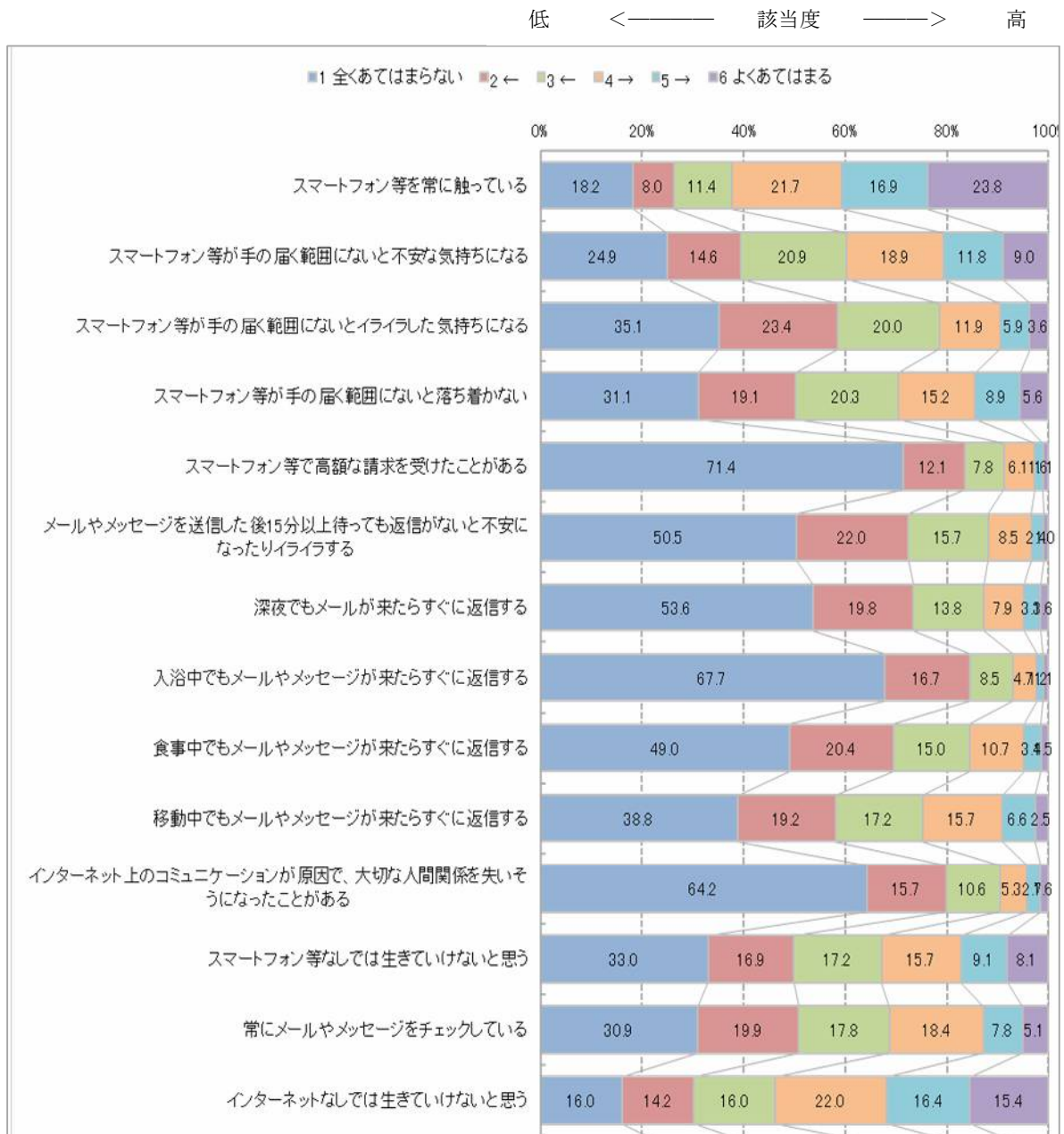


図 6 パソコン・スマートフォンの利用に伴う行動や意識への影響1

図 7 を見ると、「インターネットの普及により、必要な情報が簡単に手に入るようになった」「インターネットの普及により、生活が便利になった」という項目に対して、6 割～7 割の者がよくあてはまる・あてはまるを選んでいった。「全くあてはまらない」と答えている者は 1 割にも満たず、多くの者がネット社会の利便性を享受できていることが読み取れた。また、「ネットを介して傷ついたことがある」という項目に対して「全くあてはまらない」と答えている者は 4 割であった。つまり 6 割は、何かしらネットを介して傷ついた経験を有していることが読み取れた。これに対し、「他人を傷つけたことがある」に「よくあてはまる」「あてはまる」と回答していたのは 3. 7% (31 名) に過ぎず、加害行為に及ぶものは、ごくわずかであることがわかった。すなわち、ネットの普及は生活の利便性を高めたが、一部の加害行為者により、多くの人が傷つく経験をしていることがわかった。

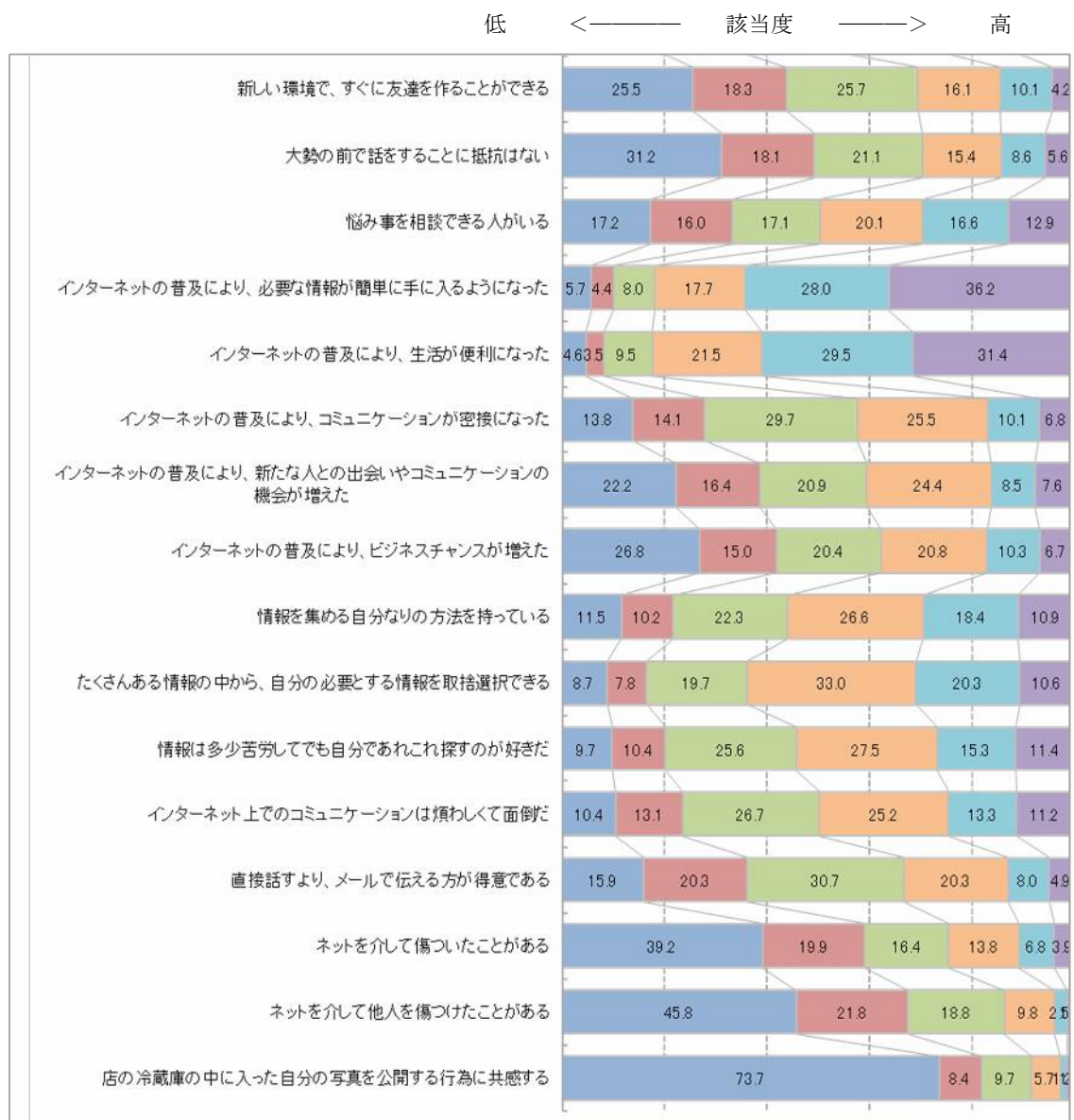


図7 パソコン・スマートフォンの利用に伴う行動や意識への影響2

低 <———— 該当度 ————> 高

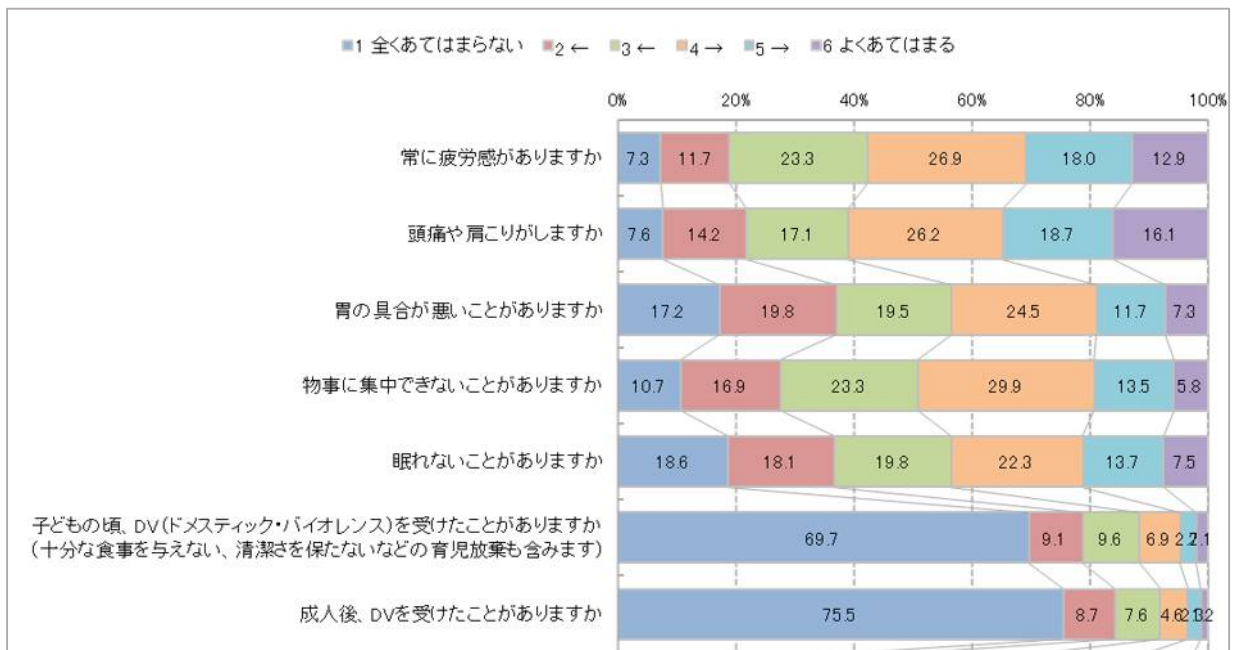


図8 身体的側面

図 8 は、必ずしもパソコンやスマートフォン利用に関してではないが、少なからず、多くの者が疲労感や身体的不調を感じており、現代病の一つといえるだろう。DV 経験は 7 割の者が全く経験はなかったが、3 割は何らかの経験を有していた。

3. 3 世代毎のインターネット上のコミュニケーションの違い

インターネット上でのコミュニケーションのツールとしてはスマートフォンがよく使用される。図 9 には、世代毎のスマートフォンの必要性を示した。若い世代ほどスマートフォンを必要と認識していることがわかる。

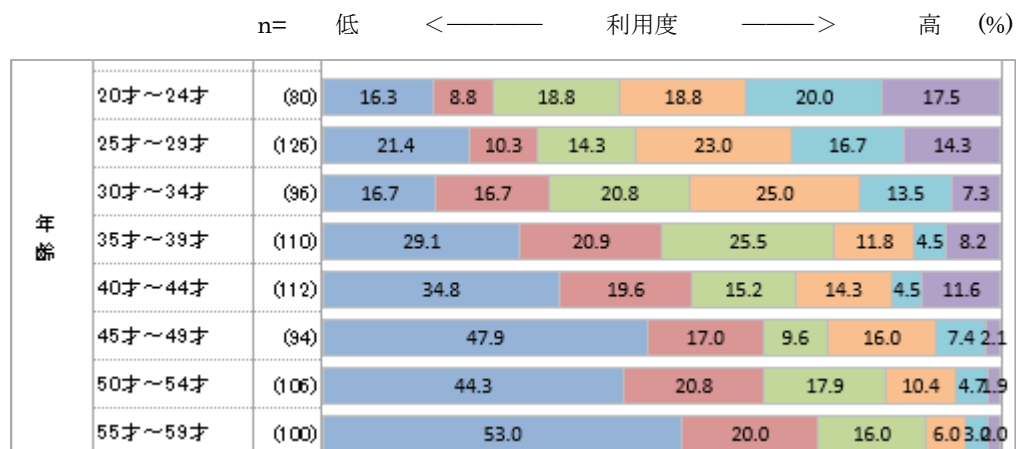


図 9 世代毎のスマートフォンの必要性

家族、友達、職場のグループ、趣味の仲間、等々コミュニケーションに LINE のグループを利用する人々が多い。図 10 には、世代毎のスマートフォンでの LINE 利用

状況を示した。図 10 を見ると、若年世代ほど利用度が高く、年齢が上がるにつれ利用度は減少している。

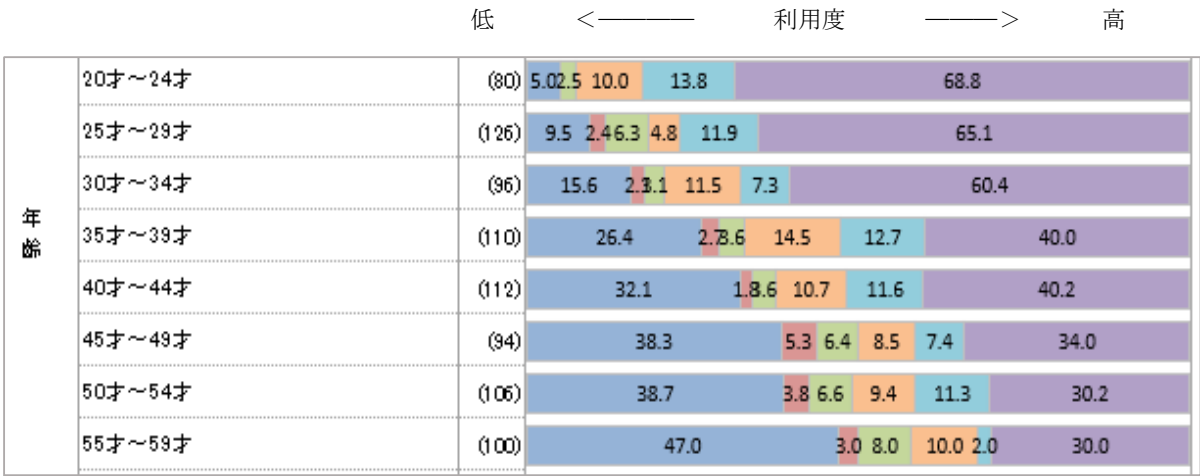


図 10 世代毎のスマートフォンでの LINE 利用状況

「インターネット上のコミュニケーションが原因で、大切な人間関係を失いそうになったことがある」という項目に関しても、若年世代ほど、ネット上のコミュニケーションにより、人間関係を失いそうになった経験を有していることがわかった(図 11)。

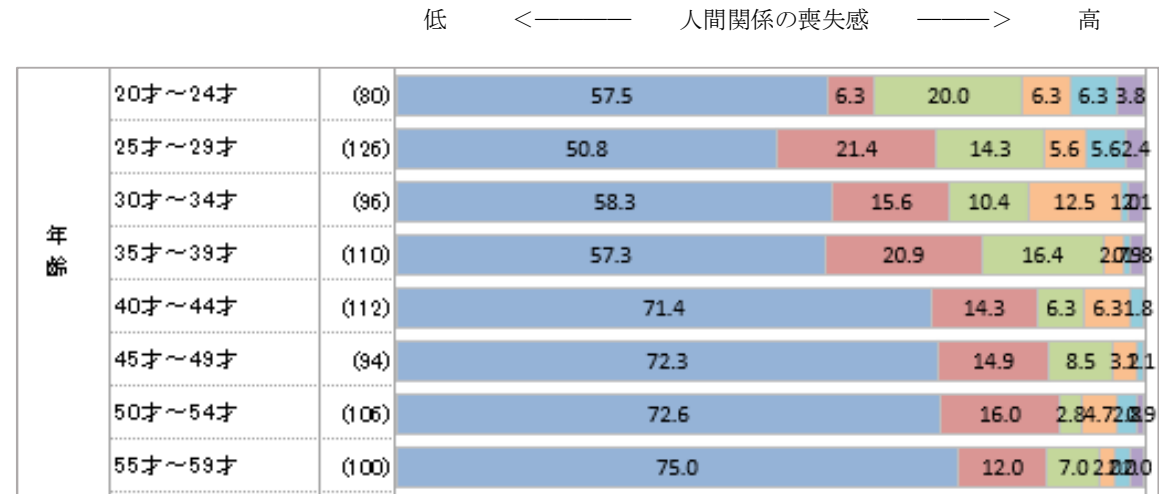


図 11 世代毎のネット上のコミュニケーションを起因とする人間関係の喪失

また、「ネットを介して傷ついたことがある」という項目に関しても、若年世代ほど、ネット上のコミュニケーションにより、傷ついた経験を有していることがわかった(図 12)。

さらに、「ネットを介して他人を傷つけたことがある」という項目に関しても、若年世代ほど、ネット上のコミュニケーションにより、他人を傷つけた経験を有していることがわかった(図 13)。

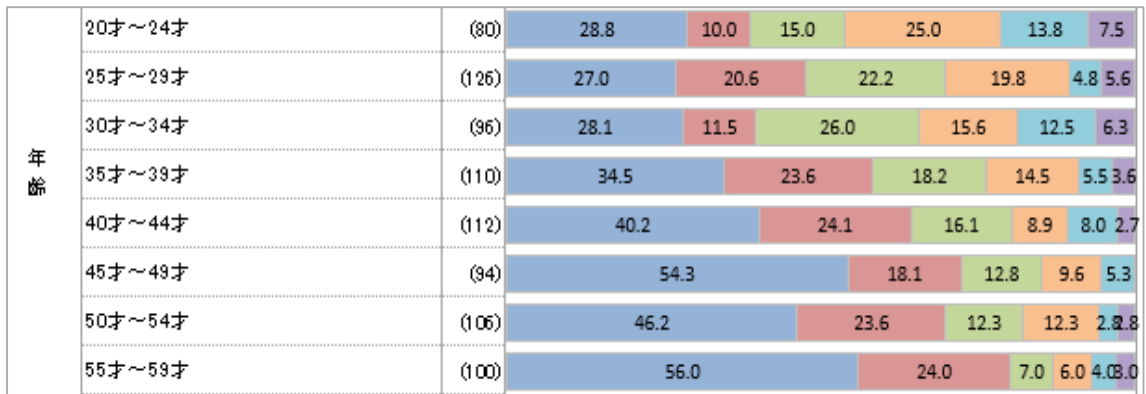


図 12 世代毎のネットを介して傷ついた経験

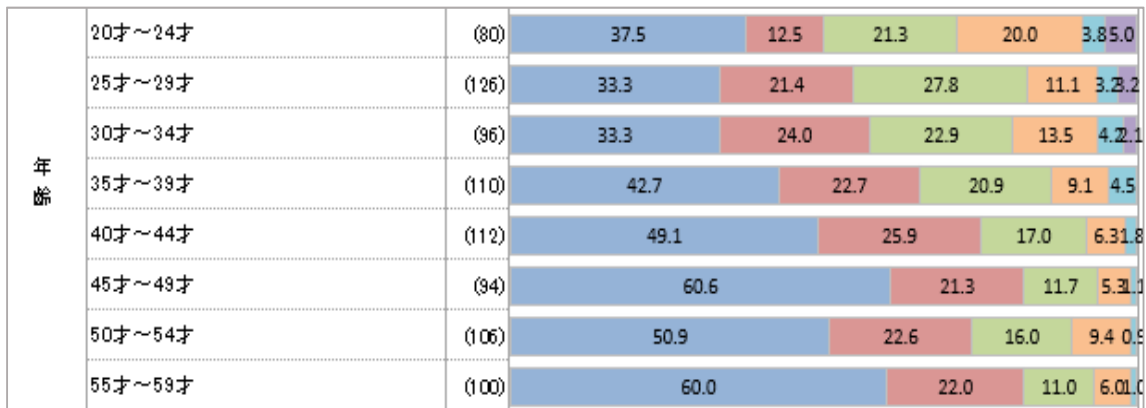


図 13 世代毎のネットを介して他人を傷つけた経験

4. 結語

スマートフォンや SNS の普及によって、情報を収集したり、多くの人とコミュニケーションをとる等の利便性を享受することができるようになった一方で、ネットを介して人を傷つけたり傷つけられたり、ネット上のコミュニケーションを起因とする人間関係の喪失が起きていることがわかった。 SNS やスマートフォン等の使用頻度の高い世代ほどその傾向にある。

メールを送ると瞬時に相手に届く。届いたのに返事をしないと既読無視をしたなどと人間関係がぎくしゃくすることがある。そのために、若年層は、すぐにメールの返事をしなければいけないと感じている場合が多い。そのため、四六時中スマートフォンから離れられない状況が起きており、その症状を「即レス症候群」と命名している。(加納, 2009)。即レス症候群を起因とする問題も数多く起きている(加納, 2016, 2017, 2018)。

ネットを介したトラブルや人間関係の喪失が起きても、それらを頻繁に使用しない世代には理解されにくい。さらに、スマートフォンからしか閲覧できないサイトが多数あり、ますます世代間を分断しているのではないかと。

かつての村社会は、多くの人とつながることや、遠くの文化と交わることは、容易ではなかったが、村の中では密接な人間関係にあり、人々を孤立化させることはなかった。しかしながら、ネット上のバーチャル村社会は、遠距離にいる人とも意気投合し共感し合うこともできるが、会ったこともなければ、意気投合した話題以外に相手のことを何も知らない場合もある。相手が急遽大病を煩いネットにアクセスが困難になったとしても、それを知ることすらできない。昨今の若年世代は、SNS 上には数百人のつながりを持っていたとしても、その絆は脆く、容易に孤立化を引き起こすだろう。広く浅く多くの人とつながることを容易にした SNS 時代に、どう密接な人間関係を築き、不意のアクシデントがあっても、孤立化しないセーフティーネットワークを構築していくことが、これからの時代を生きる者の使命といえるのではないか。

参考文献

- UNICEF Innocenti Research Centre(2007)An overview of child well-being in rich countries.
- 加納寛子(2007)情報社会論—超効率主義社会の構図, 北大路書房.
- 加納寛子(2009)即レス症候群の子どもたち, 日本標準.
- Hiroko KANO, Diefang Chou. (2018), The Relationship Between Immediate Response Syndrome and the Expectations Toward Artificial Intelligence and Robots in Taiwan, Psychology Research, Volume 8, Number 1, January (Serial Number 79) , 20-25..
- Hiroko KANO. (2017), Immediate Response Syndrome and Acceptance of AI Robots, --Comparison between Japan and Taiwan" Procedia Computer Science, Volume112, 2486-2496, .
- Hiroko KANO. (2017), Issues of Online Communication and Immediate Response Syndrome, International Journal of Social Science and Humanity, 7(6), 350-357..
- Hiroko KANO. (2017), The Spread of SNS and Influence on Health, Association of Academies and Societies of Sciences in Asia & Science Council of Japan Workshop on “Role of Science for Inclusive Society” Report, 190-198,.
- Hiroko KANO. (2016), Analysis of Usage Trends of Social Media and Self-Esteem by the Rosenberg Scale, 2016, Proceedings of Society and Human Beings, International Conferences on ITS, ICEduTech and STE2016, 360-362..